

第15回 OECD/Japan セミナーについて

文部科学省では、OECD（経済協力開発機構）が実施する教育事業への協力の一環として、平成4年度より日本国内でOECD/Japan セミナーを開催している。このたび、第15回 OECD/Japan セミナーを下記のとおり実施した。

1. テーマ “Global Strategies for Higher Education – Global Trends and Rethinking the Role of Government”
「高等教育のグローバル戦略－世界動向と政府の役割の再検討」
2. 日時 平成25年2月6日（水）～7日（木）
3. 主催 文部科学省、OECD
4. 共催 東京工業大学、国連大学
5. 場所 東京工業大学 蔵前会館（東京都目黒区）
6. 参加者数 21か国・地域、5国際機関より308名
7. 概要



2月6日(水) 第I部 基調講演

1. 開会

山中 伸一 文部科学審議官
三島 良直 東京工業大学学長



2. 基調講演

- 基調講演Ⅰ 「グローバル化時代の高等教育： OECD の視点から」
アンドレア・シュライヒャー OECD 事務総長教育政策顧問／教育局次長

OECDの豊富な統計・データを駆使し、「高等教育は、雇用と教育間に横たわるスキル・ギャップを埋め、社会の需要に応える生涯教育の提供者へと移行することができるのか」というテーマについて報告がなされた。主な論点として、教育とは持続可能な投資であること、知識産業ほどスキルのミスマッチが存在しており、公式/非公式教育双方においてギャップを埋める努力の余地があること等が述べられた。

- 基調講演Ⅱ 「ワールド・クラス・ユニバーシティの創設への挑戦」
ジャミル・サルミ 元世界銀行高等教育コーディネーター

「ワールド・クラス・ユニバーシティ（WCU）」の創設について、その定義を示しつつ、各国の事例を交えながら様々な視点からの考察結果が報告された。WCUの創設に必要な要素とし

て、優秀な教員や学生等の人材の集中、政府・民間からの資金提供を含む豊富な資金、ガバナンスの確立が指摘され、WCU 創出に向けた具体的な設置方法や留意事項などが紹介された。

○ 講演 「日本の高等教育のグローバル展開」

木村 孟 文部科学省顧問／東京工業大学名誉教授

高等教育のグローバル化に伴う世界的な学生の流動性増加や質保証に関わる国際動向について概観した上で、高等教育のグローバル化に関する日本の政策及び施策の変遷を紹介した後、AUN/SEED-Net をはじめとする現在進展中の日本の高等教育分野の海外協力プロジェクト等について具体的な特徴や成功事例を交えながら紹介がなされた。



2月6日(水) 第Ⅱ部 パネル・ディスカッション

3. 講演

○ 「グローバル化時代の高等教育における国家アジェンダ」

サイモン・マージンソン メルボルン大学教授



高等教育とグローバル化の関係について歴史的考察を加えながら、ランキングやオンラインコースなどグローバル化の進展により顕著になった様々な事象を紹介しつつ、地域別の高等教育の発展類型が示された。結論として、グローバル化時代の高等教育は、グローバルな状況を各国の多様な国内状況にどのように位置づけるのかが重要である旨強調された。

4. パネル・ディスカッション

「知識基盤社会化・市場化・グローバル化がもたらす高等教育機関と国家（政府）の関係の変容」

コメンテーター：サイモン・マージンソン

メルボルン大学教授



発表：「政府と大学との間に知識基盤社会のための最適方程式はあるか」

シーラム・ラマクリシュナ シンガポール国立大学副学長

教育大学から世界的研究大学へと変化を遂げたシンガポール国立大学の発展について紹介。政府によるコントロールとオートノミーのバランスをとりながら、公立大学・私立大学・政府がそれぞれ異なる役割を果たしていくことの重要性が強調された。

「大学評価と大学ランキング：高等教育の国際化と政府の役割」

小林 雅之 東京大学教授

広範な対象に対するキャパシティ・ビルディングとエクセレンスの追求との間に存在する緊張関係について報告。大学評価を類型化して分析。ベンチマーキングの有用性についても報告がなされた。

「市場の力が高等教育に及ぼす影響」

スティーブ・イーガン 英国高等教育財政審議会副会長

英国政府が進める高等教育の財源改革の概要を紹介し、議論すべきは市場化についてではなく、公共投資の規模と性質（誰がどの程度まで教育費を負担するのか）であり、効果的で信用に足る規制が重要である旨述べられた。



「高等教育における公と私の関係及び世界的構造変化の再考

—日本と東アジアからの視点—

米澤 彰純 名古屋大学准教授

現在のアジアの高等教育の特徴について、政府の役割という観点から概観し、教育の質保証とグローバル化の方策の検討が今後の課題となる旨述べられた。さらに、グローバル化の取組における日韓比較を行い、両国の特徴が明らかにされた。

質疑応答：

英国の改革における負の面やシンガポール大学の成功の理由、及びグローバル化における日韓両国の相違が生じた背景等について、会場より意見や質問が寄せられた。マージンソン教授からも、シンガポールの高等教育政策の特徴等についてコメントがあり、高等教育展開における政府の役割と大学のオートノミーについて、議論が深められた。



2月7日(木) 第三部 分科会セッション

■参加者 21か国・地域、5国際機関から150名が出席

5. 分科会A 「高等教育におけるグローバル化とリージョナル化」

モデレーター：北村 友人 上智大学准教授

発表：「アジアにおける国際高等教育ネットワークと地域化 ―その構造と機能―

杉村 美紀 上智大学准教授

アジアにおける様々な高等教育のリージョナル・ネットワークの代表的な取組を類型化しながら紹介。

「国際的教育ハブ：方針と視点」

ジェーン・ナイト トロント大学特任教授

国際的教育ハブを3つの類型に分類し、その特徴や理論的根拠、各国が直面する課題や持続可能性等について具体例を用いながら説明。



「域内協力におけるグローバル戦略：ヨーロッパのボローニャ・プロセス」

バーバラ・ケーム カッセル大学教授



欧州のボローニャ・プロセスの概略と展望を紹介し、高等教育と社会との間の新たな契約概念の導入について問題提起。

「グローバル教育における知識の統合 ―国際連合大学のアプローチ」

スリカンタ・ヘラート 国際連合大学シニア・アカデミック・オフィサー

国連大学における地球規模の国際課題について学問分野を融合した教育プログラムや研究と実践の統合などの取組を紹介。

質疑応答：

国際的教育ハブを受け入れる国・地域が受ける影響など教育ハブの実情や詳細に関する質問など会場から多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われた。



6. 分科会 B 国境を越える質保証枠組み

モデレーター：川嶋 太津夫 神戸大学教授

発表：「質保証のグローバルトレンド：予想される影響とは？」

ジュディス・イートン 米国高等教育アクレディテーション評議会会長

高等教育の質保証について国際的に共通する6つの傾向を指摘し、今後予想される展開について報告。



「東アジアにおけるトランスナショナル・プログラムの質保証：

「キャンパス・アジア」プログラムのモニタリング」

林 隆之 大学評価・学位授与機構准教授

日中韓 3 国によるキャンパス・アジア・プログラムの経緯と質保証機関によるプログラムのモニタリングの実施に向けた基準の策定や課題について報告。



「ASEAN における質保証の経験」

ナンタナ・ガジャセニ ASEAN 大学連合事務局長

AUN の質保証の取組である AUN 質保証マニュアルの作成や様々な域内外のパートナーとの協力体制について紹介。

「エンジニア教育の国際資格」

岸本 喜久雄 東京工業大学教授

エンジニア教育に係る国際的な質保証の取組であるワシントン・アコードとこれに対応する日本の JABEE の取組や OECD による国際的な高等教育の学修成果測定の取組である AHELO について紹介。

「湾岸諸国における質保証の取組」

ガリ・ドン エディンバラ大学国際教育部長

湾岸諸国における質保証の取組の状況を紹介し、質保証制度の構築や実施に際して、制度を提供する「中心国」とそれを輸入する「周辺国」が生じていることを指摘。

質疑応答：

すべてのパネリストに対して、グローバル化時代における各国・各地域における質保証の詳細な状況や具体的課題についての質問があり、短い時間の中、活発な議論が行われた。



7. 総括セッション

○ 分科会 A 報告： 北村 友人 上智大学准教授

分科会 A の議論の概要が報告された後、現代の高等教育は、国内のかつ国際的性質の両面を併せ持っており、誰のための高等教育なのかという点が問われていること、また、経済優先・エリート主義の考えが広がる中、教育の倫理的側面をどのようにモニターしていくのか、各国、各地域間の最適なネットワークの在り方はいかにあるべきか、質の担保と社会のニーズにいかに対応していくのかなどの点についてコメントがあった。

○ 分科会 B 報告： 川嶋 太津夫 神戸大学教授

分科会 B の議論の概要が報告された後、質保証のレジームは今や国際的な枠組みに組み込まれた「制度」として認識されていること、そして各地域・各国の独自の状況と国際的な質保証の要請との間でどう折り合いをつけるかが今後の課題となることが報告され、さらに、国際的な質保証の在り方について今後も国際的な場で議論を重ねることの重要性が強調された。

○ 総括： 木村 孟 文部科学省顧問／東京工業大学名誉教授 アンドレア・シュライヒャー OECD 事務総長教育政策顧問／教育局次長

○木村顧問

本セミナーで得られた視点や教訓に触れつつ、今後グローバル化時代において高等教育に求められる教育内容は何か、国際社会の発展に貢献する人材育成のための国際協力、国際・地域レベルにおける共通の質保証の枠組みはいかにあるべきかについての問題提起があり、政府は高等教育政策のビジョンを示し、グランド・デザインを描く役割を担うことをこれまで以上に期待されている旨述べられた。また、重要な留意事項として、シンガポールの高等教育改革は初等中等教育での教育改革によって可能となった旨付言された。



○シュライヒャーOECD 教育局次長



今や国際事業となり、各国において国づくりの要となっている高等教育は社会的な責務を負っていること、情報公開や説明責任が求められる中、政府は大学の質保証に着目すべきであることなどが述べられた。また、グローバル化時代においては、政府の介入と大学の自治のバランスをいかに図り、政府の役割の範囲をどう捉えていくかという点が重要であり、高等教育のグローバル戦略を進めていく上で政府の役割は依然として重要である旨などが述べられた。

8. 閉会

加藤 重治 文部科学省国際統括官